

フランス領ポリネシア大学で、8月26日から2日間、「文学と芸術における多文化主義とさまざまなインデンティティー」と題される会合が開かれた。主催者は同大学のSylvie André教授。フィジーの南太平洋大学で文学批評の教鞭も取る作家、Subramaniさん（インド系移民の5世代目、と伺った）が、まず政治を回避しつつ、太平洋圏島嶼文学の可能性を提唱した。

フランス語圏島嶼文学という観点からすれば、タヒチはまた、クレオールの名詞ともなったカリブ海、アンティル諸島での文学実験とも潜在的に共鳴しうる。それはまた、サハラ以南のアフリカ文学、マグレブのアラブ圏文学とも並べられよう。だがフランス語タヒチ文学は、ようやく90年代になってミシュー・シャーズMichou Chazeの『雲なき空の小川』といった中編が現れ、何人かの女流作家が断続的に活動し、タヒチ語での執筆を企てているに止まる（Mohamed Ait Aarab氏の報告が、このあたりの事情を見事に鳥瞰）。同じくフランス海外県であり、コルシカ島と並んで政治紛争が絶えないヌーヴェル・カレドニアの場合は対照的だ。その顕著な例が、最近再評価されているJean Mariotti (1901-1975)（ヌメアのDominique Jouvé教授の報告）。マリオッティの『小学校教師』（1957）などは、フランス本国の頑なな教育方針と、それに反りの合わない現場との板挟みになる教員の姿を描きだす。雪が年末に降りほしない南半球では、本国の教科書など、信用できない嘘でしかない。思うに同様の問題意識は、マルティニックの作家、ジョゼフ・ゾベル（1915-）の『ニグロ小屋通り』（1950）（ユーザン・パルシーによって映画化された）、トリニダード・トバゴの作家、アール・ラブレイスの『スクール・ティーチャー』、さらに遠くは、マルティニック体験を共有する、ラフカディオ・ハーンこと小泉八雲が、松江時代の経験に潤色した『英語教師の日記から』に至る、一連の「教師もの」を彷彿とさせる（ちなみに、夏目

連載①
太平洋の島々における多文化主義の可能性

フランス領ポリネシアの学会から

国際日本文化研究センター研究員、
 総合研究大学院大学助教授
稲賀繁美

漱石『坊ちゃん』も、その一変奏だ）。

折から話題の焦点となっている東ティモールに関していえば、ポルトガル圏の作家Luis Cadosoが想起されるに値しよう（リスボン大学、Maria Alzira Seixo教授）。政治問題、帰属問題は、その根に土地所有を巡るいざこざを孕む場合も多い。Stéphanie Pannoux-Katombeさんは、ヌーヴェル・カレドニーの葬送儀礼や墓地形態を通して、混血が進行せずモザイク状態が蠢く現地社会の動態を浮き彫りにした。またニュージーランドもマオリの人々の儀礼に用いられるプナムと呼ばれる玉石の所有権と採掘権を巡る法律的葛藤を解説したYves-Louis Sage講師の報告も、文化遺産たる象徴財と立法との、価値観の相克を活写した。

最後に、お土地柄で、ポール・ゴーギャン関係の再検討が浮上。Marie-Pierre Jaouan-SanchezがVictor SegalenによるGauguinの神話化と、タヒチの詩人Henri Hiroとの協力によってLudovic Segarraが1983年に実現した映画版*Les Immémoriaux*の比較。続いてジョージア大学のDorothy Figueiraが、ゴーギャンによる虚偽のタヒチ像捏造を糾弾し、マオリ神話とインド神話を同根とみる彼の夢は、ナチズムのアーリア民族至上主義の優生学的思考に通ずる危険があると、いささか強引に議論。これは図らずも、文脈を無視したゴーギャンの図像窃盗癖にパランブセストと多文化主義の先駆を見定める、当方の発表とは好対照。

元来、『憎しみのタンゴ』をガリマール書店から刊行したばかりのエルネスト・ペパン、また『テクサコ』でゴンクール賞を受賞し、ラファエル・コンフィアンとの共著『クレオールとは何か』（西谷修訳、平凡社）で日本でも著名なパトリック・シャモワゾーの、両アンティル諸島出身の作家が記念講演をする予定だった。が、ともにドタキャン。現地で突如その穴埋めのトリをおおせ付かったのは、不肖、本稿執筆者でありました。蛇足失敬。省略寛恕。

思

考

の

隅

景